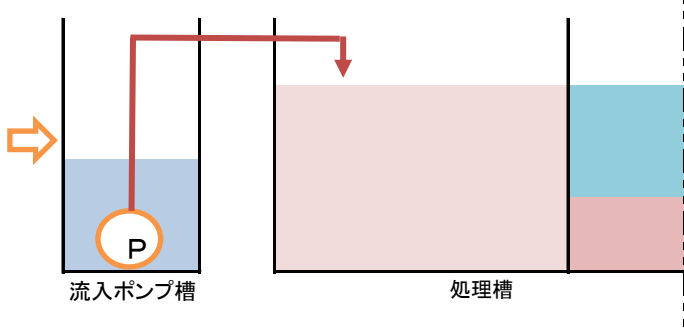




流入ポンプ槽・中継ポンプ槽で発生する油脂分の新しい処分方法！！

ディスポーザーで粉碎された生ゴミ排水は、下図のように自然流入ができない場合、流入ポンプ槽に一旦ストックされます。その時、生ゴミから出る油脂分も一緒に滞留し、右の写真①のようにボール状、もしくは油脂の塊になり蓄積されます。その結果、堆積と臭気が発生し除去処分が必要となります。



処理前・写真①

- 1、写真①のボール状油脂分を処分する方法は、1つは、そのまま処理槽外に搬出する。2つは、処理槽内で分解処理し槽外に搬出の2通りに大別されます。
- 2、写真②はボール状になった油脂分を処理槽内で分解処理した状態です。流入ポンプ槽に蓄積した油脂分を処理槽内では、1～2ヶ月間で油脂分解ができます。排水処理槽には油脂分を分解する能力が備わっています。但し、油脂分解補助装置(無償)を処理槽内に設置します。

処理前			処理後		
性状	:	粘性ボール状	性状	:	乾燥した抜け殻
臭気	:	強い	臭気	:	無し
含水率	:	90%~80%	含水率	:	30~0%



処理後・写真②

水物語No10 金沢城下に今も水を届ける辰巳用水とは！

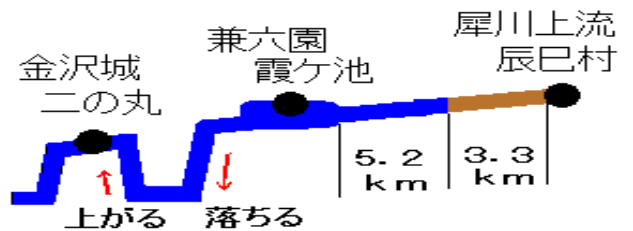
日本には、その難度や規模から四大用水があります。長野県の五郎兵衛新田用水(1630年)、金沢の辰巳用水(1632年)、東京の玉川上水(1654年)、芦ノ湖から導水した箱根用水(1670年)です。明治維新以前の最大工事と言われた箱根用水トンネルは約1.3km。辰巳用水のトンネル部分は約4kmで、この時代にしていかに長いか分かります。

石川門に百万石の威容を忍ばせる金沢城、そして隣接する日本三大名園・兼六園はいずれも市街が見渡せる高台にあります。現在も1日に1,400トンもの水をこの兼六園や金沢市内に送り続ける辰巳用水は、江戸初期に造られた延長12kmの実に382年前の手掘りの水路です。

来年3月には北陸新幹線が小京都金沢まで開通致します。金沢の街並みが情緒にあふれているのは武家屋敷や茶屋街とともに、市内を縦横に流れている美しい水路群があるからです。辰巳用水その水源は金沢城の「辰巳の方角」犀川の上流です。驚くべきことに地下に導水石管を設置しサイフォン原理を駆使し城下に水を届けています。

1632年、前田家3代藩主利常が小松の町人板谷兵四郎に設計をさせ造らせたという。その工期はなんと超突貫1年で造ったそうです。目的は防火用水であつたらしいが、城の防禦強化や新田開発も意図されています。明治初期の記録では、この用水を使用する水田の面積は100ヘクタールを超えている。正に加賀百万石の城下町は百万石の農地が育てたのです。

金沢には、辰巳用水をはじめ、大野庄、鞍月、長坂、泉、中村高島、大豆田、樋俣、中島、小橋、三社、木曳川、柳川、河原市など多くの農業用水が造られ、今も多くが活躍しています。



辰巳用水に使用された導水石管

8月28日、事務所は下記に移転しました。

東京都中央区新川1-16-8 ケーエスビル 6F

汚泥ゼロ・臭気ゼロ

ハイブリッドシステム推進中！

株式会社クリーンテックサービス

参考資料

： 水土の礎(加賀を創造した人々)